田中康夫の新ニッポン論 34

「JAPAN」処分

「日本銀行の『量的・質的金融緩和』によって、日本経済がデフレからの脱却を果たすことで、革新的な金融政策がデフレを克服することができるというリーディング・ケースを示したい」。

昨年4月19日にミネソタ・エコノミック・クラブで宣言した黒田東彦総裁は、期待インフレ率が高まれば、予想物価上昇率ならぬ現実の物価上昇率も上方シフトする、と信じて疑わぬ御仁。

今年1月29日に「マイナス金利付き量的・質的金融緩和」導入を決定した、その5日後の〝節分の日〟には共同通信社主催の講演会でも、「これまでの中央銀行の歴史の中で、恐らく最も強力な枠組み」だと胸を張り、「本気で取り組んでいる以上、（2％の）『物価安定の目標』は必ず実現」と高言。

節分の豆の如くに〝追い銭〟を貸し手が借り手に支払う寸法のマイナス金利＝資本主義経済の自己否定だと〝信じて疑わぬ〟僕にとっては、「欲しがりません　勝つまでは」と一億総参加の竹槍訓練に駆り出されたような違和感です。

「皆さまが、子供の頃から親しんできたピーターパンの物語に『飛べるかどうかを疑った瞬間に永遠に飛べなくなってしまう』という言葉があります。大切なことは、前向きな姿勢と確信です」。

こちらは、昨年6月4日に日本銀行金融研究所主催の国際コンファランス開会式に於ける黒田氏の挨拶です。ウ～ム、円安・株高で景気浮揚の筈が、円高・株安で消費低迷の逆転現象を「前向きに」絵解きする「姿勢」も熱烈キボンヌ。

「飛べるのはあくまで力学的な裏付けによるものであり、飛べないものが飛ぶのは夢の中だけ」。「異次元緩和は幻想的色彩を帯び始めたのではないか」。

日本銀行出身で全国地方銀行協会常務理事を務める中川洋氏が昨年7月3日付「日本経済新聞」夕刊「十字路」で看破の一文も想起しました。而して経済のみならず政治の世界でも「幻想的色彩を帯び」発言が飛び交っています。

「今アメリカは黒人が大統領なってるんですよ。黒人の血を引くね。これは奴隷ですよ。はっきり言って」。言わずもがな、弁護士という言葉で勝負する筈の生業で現在も禄を食む丸山和也参議院議員が2月17日の憲法審査会で広言した内容が国内外で〝話題〟です。

「二院制」をテーマに開催された今回、「良識の府」を任じる参議院に於ける「党議拘束」は是か非か、の議論の最中の「脱線」です。

「産経新聞」も「『米国は黒人、奴隷が大統領』自民・丸山法務部会長　参院憲法審査会で発言」と見出しを打ちました。

翌18日に記者団に「リンカーン大統領もマーチン・ルーサー・キング牧師も尊敬している。尊敬の念が迸った言葉がどうして人種差別の発言と受け取られるのか全く驚きだ」。「批判は不条理で、非常に怒りも覚える」と抗言。「親の心子知らず」な言動に、政権中枢も頭を抱えているでしょう。

が、より看過できぬ発言は以下の箇所ではありますまいか。

「日本がですよ、アメリカの第51番目の州になる」。「そうするとですね、例えば今、集団的自衛権、安全、安保条約とこれ全く問題になりませんね」。「日本州の出身がアメリカの大統領になる可能性が出てくる」。「拉致問題ってありますけど、この拉致問題すら恐らく起こっていないでしょうね」。

アメリカの第51番目として日本が存在していれば拉致問題も起こり得なかった、とは即ち、国民の生命を護る能力無き日本と法廷で述べるが如き。更には日本国憲法の改憲・加憲・護憲云々以前に日本国消滅の言説です。琉球処分ならぬ「JAPAN」処分を自ら提起の〝売国奴〟〝非国民〟ウイルスが、「自主憲法」制定を切望する面々の中に紛れ込んでいたとは、嗚呼。

★次号4月号の発行日は3月25日（第4金曜日）です。